あの、そこ私の席なのですが

道案内

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あの、そこ私の席なのですが

【Ｎコード】
Ｎ９７７９Ｙ

【作者名】
道案内

【あらすじ】
偶然、自分の席に座るクラスメイトを目撃してしまった加奈。その日以降、彼の数々の行為に振り回される羽目に。★無口美形ワンコに溺愛される平凡少女のお話です★

あの、そこ私の席なのですが

「……」

慌ただしく教室の扉を開けた桑原加奈は、目の前の光景にそのまま姿勢で固まった。

三時間目と四時間目の間の休み時間。次は移動教室の為、人はほとんど残っていなかった。加奈も途中でノートを間違えた事に気づき、あわてて引き返してきたのだ。

教室の中に残っていたのは二人の男子生徒。

「あっちゃー…」

此方を見て、気まずげに顔を引きつらせるクラスメイトの松本君と、……気のせいでなければ加奈の席に座り、加奈の机にしがみついているもう一人。

「……」

窓際の後ろから二番目、そこは間違いなく加奈の席だ。

此方に後頭部を向けている人物の頭は、上下に激しく揺れている。頬を机にスリスリと擦りつけて……擦り、付け……。

「荒川、荒川」

立ち尽くす加奈に背を向けて、誰かさんの肩を揺する松本君・・・・・・って荒川君!?

「……なんだ、邪魔するな」

顔も上げず、不機嫌そうに答える荒川君らしき人……というか邪魔ってなんですか。

「いやいや、ほら、見られちゃったから」

「だから邪魔す、……なに？」

のっそりと松本君を見上げた荒川君の視線が、扉の前で立ち尽くす加奈の方へと向き、止まった。

切れ長の一重の目を見開き、微動だにしない荒川君らしき人、……いや荒川君だね、うん。何してるのさ、荒川君。人の席で。

その両手は未だに加奈の机をしかと握りしめたままだ。

「「「……」」」

三人の間に、とてつもなく重い空気が流れる。その静寂を破り松本君が口を開いた。

「あー桑原さん、どしたの？」

「……それはこっちの台詞なんだけど」

「……だよねーあは、は、はは」

松本君のわざとらしい笑いが響く中、荒川君は此方をじっと見つめたままで動かない。
その視線の激しさに、加奈の方はとても荒川君を見返せない。
「あーやばいよー次始まっちゃうよー」
白々しさも全開の口調で松本君は言い、荒川君の腕を掴むと、ぐいぐい引きずるように加奈の横を通り過ぎ
「桑原さんも急いで急いで、遅れるよー」
そのままズルズルと荒川君を連れ、出て行っていまった。その間も荒川君の熱視線は外れないままで。

「……なんだったの」
どっと疲れを感じながらも、ノートを取り出すために机に向かう。
……一応、我が机に何かされてないかもチェックするためにも。

意味が分からない

結局、次の授業へは少し遅れてしまった。いや、だってほら、異常がないか念入りに調べてたら……ねぇ。

すみませんと頭を下げた時も、とある方向から重い視線を感じるような……気のせいだよね。

教室での席がそのまま反映されているので、窓際後ろから二番目の席へと腰を下ろす。

「えーそれでは、教科書２３ページの……」

教師の言うままにページを開くも、内容なんてちっとも頭に入ってこない。

思い浮かぶのは先程の出来事ばかりで。……結局あの二人、というか荒川君は私の机で何をしてたんだろう。何やら机に頬擦りでもしてたように見えたけど……いやいや、そんな馬鹿な。

あの二人、タイプは違うものの、二人揃って超モテ男だし。

華やか美形の松本啓介君。

ふわふわの茶色い癖っ毛に、甘い垂れ目の整った顔立ち。巧みな話術で距離を縮め、常に数人の女の子と付き合っているという噂。

……さっきみたいにぎこちない松本君なんて初めて見た気がする。常にある余裕オーラもなんか消えかけてた感じだし……んー？

そして問題のもう一人、冷徹美形の荒川祐也君。

常に無表情なその顔は凄まじく整っていて、一切の隙がない。癖のない黒髪に切長の瞳。三秒目が合ったら、どんな女でも惚れさせるという逸話さえある。

最も、告白してきた女の子は全て一刀両断してるらしいんだけど……っってイタいイタいイタい。何だか痛い気がする。体の右側が凄まじく痛い。

ちなみに
私、窓際後ろから二番目。
荒川君、廊下側の一番後ろ。
おまけで松本君、私と同じ窓際の一番前。

まさかと思いつつ、チラリンと右斜め後ろを向く……えぇぇぇっ！

め、目、目が合った……！！
一番奥の人と（荒川君なんだけど）合っちゃったよ！！

「……」

確認。

……えぇぇぇっ。私、何かしましたでしょうか。

うろたえたら負けだ

「～であるからして、このように～」

あと１０分、あと１０分。

チクチクくる視線に耐えること３０分。心なしかお腹も痛くなってきた気がする。

「え～次に、問２と問３を」

あーもー早く終わっ

「荒川、桑原。前に出て解いてみろ」

ぎょへええっっ、なんですとっ！？わ、私ですか。顔が引きつるのが分かる。

「なーんか集中してないからな、お前ら。」

化学担当の山下先生が、半笑いで言ってくる。

「ほらほら、早く前に出ろー」

ううっ、ツイてない。泣く泣くノートを片手に立ち上がる。ガタッともう一人も立ち上がる音も聞こえる。こうなったら、さっさと終わらせて席に戻ろう。幸いなことに答えは分かっているし。

周りを見ないように足早に黒板へと向かう、松本君の傍を通る時はちょびっと息をつめてしまったけど。

えーと、チョークチョーク……

……え？

ピキっと教室の空気が固まったような気がする。というのも全て、私のすぐ横にいらっしゃる方のせいなのですが。

～回想～

えーと、チョークチョーク。あ、あった……え？
私がチョークを掴んで三秒後、私の手に一回り大きな手が重なりまして。横を見やれば荒川君。
あ、なるほど。荒川君もチョークを探してたんですね。にしては三秒のズレがあったような気もしますが。では、コレは譲りますよ。私は他のを、他のを……

～回想終了～

……あの、手を放してください。

遠慮します

「……あー、荒川？どした？」

静まり返った教室に、山下先生の声がむなしく響く。

先生っ、もっと言ってやってくださいっ！明らかにこの方、おかしいんです！

背中を冷たい汗が伝い落ちる。う、動けない。これから私にどうしろと……っ。

俯いた視線の先に、私の手をがっしりと掴んでいる手が映る。ちょっと力を入れてみるも全く動かない。チョークが欲しいなら譲りますからっ、まず手を離してくださいいいっ。

ぐっぐっと静かな攻防が繰り広げられる中、ガタッと誰かが椅子から立ち上がる音がした。縋るような思いでそちらに目をやる。

「荒川、荒川」

どうどう、とまるで野生の大型動物をなだめる様に、松本君が歩み寄ってきていた。

「あーごめんね、桑原さん。どうもコイツさっきので振りきっちゃったみたいで」

苦笑しながら、何やら訳の分からない事を言う松本君。フリキッタって何ですか？

「ほら荒川、お前もいい加減にしとけよ、授業中だぞ？」

ポンポンと荒川君の肩を叩く松本君。それに合わせて恐る恐る荒川君へと視線を向けると、私より２０センチは高いであろう顔と目が合う。

「「……」」

気のせいでしょうか、握られた手に更に力が入ったような……。

「あー……お前ら、とりあえず席戻れ」

山下先生の疲れたようなような声に、ぎこちなく、握ったまんまだったチョークを放す。

えーっと席に戻れだそうですよ、荒川君。って松本君、さっさと戻らないでください。この人を置いていかないでください。

不意にグイッと手を引かれる。え、え、と混乱状態で、荒川君に手を引かれるまま歩きだす。

ひいぃぃっ、し、視線が、視線が刺さる。あえて見ないふりをしていましたけど、クラス中の視線がグサグサ刺さってるっ。いっそ気を失いたくなる中、自分の席へとたどり着く。

……あ、荒川君の席はこの列じゃないんですけど、なんですか、わざわざ連れてきてくれたんですか手を繋いで……ううっ。

あ、はい座ります。椅子を引いてくれなくても座りますから。荒川君もどうぞ自分の席に戻ってくださいっ。ってなんですか！？なぜ手を握っているのとは逆の手で頭を、頭を撫でるのですか……？

そのまま、クラスメイトがガン見する中、チャイムが鳴るまで撫で続けられた。

……席に戻ってください。

怒らないので正直に言ってください

「……じゃあ今日はここまでな」

チャイムの後、山下先生が力なく告げるも誰一人、前を見ようとしない。私の頭を撫でくり回しているこの方も、手を止めようとしない。か、顔が上げられない。……って心なしか触れてくる範囲が広がってきているような気が……っ。

「ハア……とりあえず、荒川は席に戻れや」

ほら日直、号令ー、心底疲れたというように山下先生が言い放つ。その声に、ぐいぐいと触れていた手をそっと離した荒川君は、じいいいっと私を見つめた後、くるりと踵を返し席へと戻って行った。

起立、という日直の声にヨロヨロと立ち上がりながら、私は平穏な生活の終わりを悟った。

に、逃げたい……。

俯いていても感じる視線の嵐。授業が終わったにも関わらず誰も教室に戻ろうとしない。驚愕、好奇、嫉妬、あらゆる意味を含んだそれらが私に集中している。

そんな状況下にもかかわらず、あろうことか山下先生は早々に出て行ってしまった。……先生、確かに以前から放任主義だとは知っていましたが、これはあんまりです。

徐々に大きくなっていくざわめきに心折れそうになりながら、素知らぬ風に動き出す。向かうは斜め前の席の友人、長谷川美紀だ。私を巻き込むなというオーラをばしばし出す美紀に構わず、細い手首を鷲掴みそのまま足早に特別教室を後にした。

「はぁ、あんた何したのよ」

廊下を二人早足で進みながら、面倒くさげに美紀が問いかけてくる。

「……何もしてない」

精神的な疲れをどっと感じながら、力なく答える。

「ほんとに？」

整った顔を訝しげに歪める美紀に、再度うなずく。ホント理由があるのなら私が教えてほしいくらいだよ。確かに人の机で何かしてる荒川君に遭遇はしたけど……あれって、

「あんた気付いてなかっただろうけど、三谷とか凄かったわよ」

考えを巡らせていると、隣からの笑いを含んだ声に遮られた。

「え？」

「あ、やっぱ気付いてなかったのね」

はぁ。自分の状況にいっぱいいっぱいで、周りを見る余裕なんてとてもとても。ミタニ、というと三谷蘭子さん？荒川君の事が好、きだと公言している……ひいっ！？

「なんか般若みたくなってたわよ」

くすくすと軽く告げる美紀に理不尽な怒りを覚えそうになる。あはは じゃないよ！あ、あの三谷さんに目を付けられでもしたらどうすんのさっ！あぁなんだか息が苦しくなってきた気がする……。

「あ、二人とも遅かったね～実験でも長引いたの？」

なんとか辿り着いた教室では、いつも一緒にお昼を食べる隣のクラスの友人、石森さくらが待っていてくれた。その温かな笑顔に抱きつきたくなる。だが、今はそんな時間はない。いつもは此処で食べているが今日はとても無理だ。

不思議そうなさくらに謝りつつ、各々弁当を手に教室を出る。ごめ

んさくら、今は説明する時間も惜しいんだ。美紀はなにやらめんど臭そうだが気にしない。親友の一大事でしょうが！

めったに利用する事のない食堂へと落ち着き、やっと一息つく。

「加奈ちゃん、どうしたの？」

こくりんと可愛らしく首を傾げるさくらに癒されつつ、口を開こうとしたその時食堂の空気が波打った。そこかしこから小さく嬉しげな声が上がる。それにひっかかるものを感じ、ふと視線を巡らすと、食堂のの入り口から此方に歩いてくる二人の人物、が……！？

カキンと固まるこちらを余所に、その非常に目立つ二人は私たちと同じテーブルに腰を下ろした。

……え？確かにこの食堂のテーブルは六人掛けだから、まだまだ余裕ありますけど。でも周りを見て下さい？まだまだ無人のテーブルが山ほどありますからっ。ほら周りの皆さんもなにやら不審がってますよぉぉ。

固まったままの私に、心底メンドーと言いた気な美紀、不思議そうなさくら。

「あーごめん、俺らもいいかな？」

キラキラ笑顔で聞いてくる松本君。だけどその笑みはもう私には胡散臭いものにしか見えないっ。

「えーっと？」

さくらが此方にくりくりお目々で尋ねてくるが、答えてあげられる余裕はない。なぜ元凶がここにっ……。しかもまたしても私の顔を凝視してるし近い近い近過ぎる！！

さくら　　空席　　松本君
　　テーブル
美紀　　私　　荒川君

ガタタッと椅子を動かして更に距離を縮めようとする荒川君。ひい、美紀、美紀もっとそっちに詰めて！当たってる当たってるからっ肩腕足が当たってますから！

食堂の空気が凍りつくのを感じる。信じられないと此方を凝視する目、目、目。あぁぁ本当に倒れてしまいそうです。

「……とりあえず食べましょ」

淡々とした美紀の声に気を落ち着け、お弁当の包みに手をかける。簡単な結び目なのに異様に時間がかかります、手が震えているのは

気のせいです……って

え……？

「加奈？」

動かない私を呼ぶ美紀の声が聞こえるけど、反応できない。

ええっと……え……？

今朝、母が作ってくれたお弁当を包んだのは私。きちんとお箸も入れた。紅いウサギが可愛い箸入れを……なのに、なぜっ割りばしが私の包みの中にぃっ！？

ばっ、反射的に右隣を見る。私の三倍はある大きなお弁当を広げている人物の右手には

お、お、お、お前かぁぁっっ！！

怒らないので正直に言ってください（後書き）

お気に入り登録、ありがとうございます。
感想いただけると嬉しいです（〇〇だったの一言で構いませんので）

か、かわかわかわ

荒川君の右手、その大きな手が持つには違和感バリバリの紅いお箸。ちっちゃなウサギが三匹プリントされてるそれは……私のですよね？

ナゼドウシテナンノタメニ……背中が寒くなってきました、そこから目が離せません。

というか何時私のお箸が、この方の手に渡ったのでしょう……登校して机の横にお弁当をの入った手提げかばんを掛けて、それから四時限目の移動教室まで私は席を離れなかった、筈……うん。

となると、やはりあの時……なのでしょうか。人の机に座りこみ、荷物を漁って箸を入れ替、

「……荒川、あんたさぁ」

左隣の美紀も、私の異常の原因に気付いた様で溜め息を吐くと、呆れを含んだ声で続ける。

「それ。その箸、加奈のでしょ。なーんであんたが持ってるのよ」

あぁぁ美紀さん美紀さん美紀美紀さん！よくぞ聞いて下さったっ。そうなんだよ、この人ちょっと変なんだよ。無視してたけど、この状況下でさえ足が何か変な動きしてるしっなんでそんな擦り付けるように動いてるんですかっ！

ヨ、ヨシ。美紀にだけ任せるわけにはいかない。私も言わなきゃ…

…女には言わなきゃいけない時があるんだっ。幸い此処には美紀もさくらも、胡散臭いけど松本君だっている！

ぐっ、目に力を入れて荒川君を見据える。相変わらず目が合うけど……負けない！

「あ、ありゃかわくん！！」

ひあぁぁぁ緊張で口が回ってない。

負けてる、最初からなんか負けてるよ私っ。ふぅーふぅー落ち着け、明らかに分はこちらにあるんだからっ！

って荒川君、なにテーブルにつっ伏してるんですかっ。私はあなたに言いたい事があるんですよっ……ってなんか荒川君の大きな体が小刻みに震えてるような。うわっ反動でテーブルまで揺れてるっ、あぁお弁当が落ち

「……かわいい」

はい……？今なにか仰いましたか？
目の前のお弁当を押さえたまま右下を向く。
机に伏せたままの、此方を見上げる荒川君と目が合う。

「かわいい……加奈」

はいいいいいいいぃ！？

気をしっかり持て

返り討ちです。
意気込んで問い詰めようとした所、見事に返り討ちにされました。

カワイイ、カナって聞こえたんですが……可愛い？というかカナとはもしかしなくても私の事でしょうか。下の名前で呼ばれるほど親しくはないというか関わりも無いというか。茫然としたまま、ぐるぐると思いを巡らせる。

ぼけっと見つめる先、のっそりと荒川君が上半身を起こし、手を動かす。そのままお弁当の上に乗っている私の手を丁寧な仕草で外し……って！

「な、な、な」

なに自然な感じで盗っていってるんですか！それは私のですよっ。大体あなた、自分のお弁当があるじゃないですか、なに人のまで欲しがってるんですかっ。

いそいそと（……うん、目の錯覚だろう）蓋を開けようとする（うきうきオーラが出ている気がする）荒川君の腕を掴んで止める。

「……？」

何故止めるのか分からないとでも言いたげに見つめられ、思わずたじろぐ。でもでもでもっそれは私のですからっ、この場合おかしいのは荒川君の方っ。

ひるまず腕を掴んだままでいると、不意に荒川君が頷いた。分かってくれたのかと涙が出そうにな、

「半分」

「……え？」

「半分こ」

いやいやいやいやそういう事じゃないんだよ。おかしいでしょう、明らかに。

誰かこの人に常識を教えてあげてください。私の手にはおえません。

助けを求めて振り返る。

真っ直ぐお弁当を見つめ、黙々と口に運ぶ美紀。

ミニトマト片手にモゴモゴと口を動かすさくら。目線が合ってなぁに？と傾げられたお顔が可愛いです。

紙パックコーヒー牛乳のストローを銜えたまま、生温かい目でこちらを見ている松本君。

「……もう半分こでもなんでもいいから、はやく食べなさいよ」

こちらを見もせず投げやりに言う美紀に、なんだか泣きたくなった桑原加奈、十六歳です。

食い違うばかりです

暫し黄昏ている内に、荒川君は勝手に蓋を開け終えていた。しかも気付けば私の右手は荒川君の左手と繋がれている。……あれ？

しかもなんか指、絡まってるんですけど。これは俗に言う恋人繋ぎってやつなんじゃ……もう言葉もありません。

荒川君はそのまま、私のお弁当を凝視していた。

ナ、ナニ？気になり私も覗き込む。

えーと今日のお弁当の中身は

ご飯
卵焼き
鳥の唐揚げ
ほうれん草のお浸し
冷凍食品のヒジキ

変わらず美味しそうです、ありがとうお母さん。でも、どうみても一人分しかないよね。半分こってどうするつもりなんだろ。

「加奈の？」

「え？」

「加奈の手作り？」

「え、いやお母さん、だけど」

朝に弱い私にそんな時間はありません。

「……そう」

心なし残念そうに呟いた荒川君。だが次には、深く頷くと

「でも、加奈の」

なにやら自信満々に断言し、右手の箸で卵焼きを掴も、……ってちょっと待てぃ！

「そのお箸っ……私の、だよね」

それは私のでしょ！荒川君はこの取り換えた割りばしを使ってよっ。

「……駄目？」

……駄目って何ですか。

結局こうなる

「……駄目です」

当然じゃないですか。なに勝手な事言ってるんですか。

さぁ返せと左手をつき出す。

「……」

なんか、むうぅぅ理不尽なって顔してますけど駄目ですよ？こんな勝手が通ると思、ってちょっ……！？

ひょい、パク、もぐもぐ。

……食べたっ。人のお箸で卵焼き食べたよこの人っ。。

「ん」

はぁっ！？いやいやいや、なに「はい返す」みたいに差し出してるんですか。むりムリ無理、本気で無理。あなた使ったじゃないですかっ！

「……もぅいいです。割りばしで食べるんで、手、離してください……」

なんか疲れちゃったな、ほんと……左手に割りばしを持ち、ぼんやりしてると

「松本」

荒川君が一言、松本君の名前を読んだ。

すると、向かいの席の松本君が、ちょっとごめんね～桑原さん、なんて言いながら手を伸ばしてきて……あっという間に割りばしを割った。

「はい、ど～ぞ」

「……」

……これはお礼を言うべき、なの？

もはや何が正しいのか分からなくなる。深く考えたら負けのような気もするし。

「……ドウモ」

「いえいえドイタマシテ」

とにかくこのままじゃ昼抜きになってしまう。午後を空きっ腹で過ごすのは嫌だ。

「荒川君、手」

唐揚げを口に運ぶ荒川君を呼ぶ。

「私、右利きだから」

それに、荒川君はあぁと頷き私の右手を離す。そして当たり前のように私の左手を握った。

……うん。とりあえず今はご飯だ。ご、は……ん

「ん、うまい」

「……」

「うまい」

「……」

「んまい」

「……」

……あのぅ半分ことという話は、どうなったんでしょうか。

硬直しちゃいます

みるみる減っていく中身を、割りばし片手に呆然と見つめる。あ、
あ、ぁ、ご飯が唐揚げが卵焼きがぁ……。

ムグムグ……ゴクン
ふぅと満足そうに一息ついた荒川君が

「ん」

半分、と私の方にお弁当箱を差し出してきた。

「……」

ほうれん草とヒジキが僅かに残っている。

「……」

頬を引きつらせながら、チラッと横目で確認してみる。

「……？」

……食べないの？みたいな顔してる。

無言の私を見かねたのか

「荒川ぁ、いくら桑原さんが小柄だからってさぁ、それじゃどう見ても足りないって」

美味しそうな焼きそばパンにかぶりついている松本君が、呆れたように告げる。

すると荒川君は不思議そうに私を見つめ、問いかけてきた。

「……足りない？」

「……っっっ、足りないに決まってるでしょっ！！」

瞬間、私の中の何かがキレた。その綺麗な顔を、強く睨みつける。

私のお弁当なのに……っ

空腹と、訳の分からない事ばかりする荒川君への苛立ちが爆発し、ジワリと瞳の奥が熱くなる。

沸き上がる衝動のままに、繋がれたままだった左手をぶんっと振り払う。

そんな私に、心底驚きましたみたいな顔で固まった荒川君は、硬直後、わたわたと自分のお弁当に手を伸ばしパカッと開けると、ずいっと差し出してきた。

大きな体に比例した大きなお弁当。

ご飯

肉、肉、肉！！

隅っこに申し訳程度にキャベツの千切り

「……」

無言でお弁当を見つめる私に

「全部、やる」

「……」

「だ、から……っ」

「……」

「……っぅ」

……え？

さながら滝のようです

「っ……っぅ」

眉は下がり、ぐっと引き結ばれた口許は慄いて。此方をひしっと見据える瞳はうるうると潤み。
大きな体を小刻みに震わせ、懸命に嗚咽を堪えている……荒川君。

え、え、え
思考が追い付かず、只々固まるしかない私。
気付けば辺りは静まりかえり、荒川君の息遣いだけが広い食堂に響きわたる。

こ、これは私、が泣かせたの？え、えっ？私が悪いの？
衝撃に真顔で固まるしかない私を見つめ、更に荒川君の表情が歪み、ふぇっっという声と同時にこぼれ落ちる涙。

ぽろ……
ぽろぽろっ
ぼーたぼたぼたぼたっ！！

あ、えっ、はっ、ええええええ！！
泣くを通り超した勢いで、次から次へと溢れ出てくる大粒の涙に、
申し訳ないが……ヒイてしまう。

フリーズした空気の中

「あーあ」

わざとらしく吐かれる息。
なんだか嫌な予感しか感じさせないそれに、恐る恐る顔を向ける。
案の定、ヤツ……松本君は

「荒川泣かせちゃったねぇ、桑原さん」

愉しくて仕方がないというような満面の笑みでそうのたまった。
はい？勝手にお泣きになりましたよ？……なんて言えたらどんなにいいか。ビビりの私はこの衆人環視の中、意見することなんて出来やしない。

「荒川もさ、ワザとじゃないんだよ？」

首を傾けて、分かるでしょ？とでも言いたげに上げられた唇が憎たらしい。
隣からは絶えず、えぐっえぐという盛大な嗚咽が伝わってきて……
居た堪れない。

あぁ……全て忘れて逃げ去ってしまいたい。

さながら滝のようです（後書き）

短くてすみませんっ

謝罪ですか、脅迫ですか

ふっ、えぐ、ぅえっ

「コイツに非があるのは誰の目にも明らかだし。半分なんて言っといて、これはないよね」

眉を下げ申し訳なさげに苦笑する松本君。それは傍から見れば、こちらに理解を示し、友人の非を認め謝罪する善良な人物に見えただろう。

だがしかしっ此方を見る目の奥には隠しきれない笑いがあって。

その余りのしたたかな態度に、怒りを通り越して感心さえしてしまう。

「コイツも反省してるみたいだし」

ひっく、えぐ、ぅぅっ

「許してやってくれないかな？」

整った顔を悲しげに歪める松本君。

……見かけだけなら、充分過ぎるほどの低姿勢な謝罪に頬が引きつる。

「……」

案の定、あらゆる方角から向けられていた視線に、淀みが生じる。
『アンタ荒川君泣かせた上に、松本君にまで謝らせといて……許さないとか言わないでしょうね！？』な感じの棘が多数突き刺さる。
私の反応待ちな空気の中、刃向かう事など出来るはずもなく

「……はい」

ぎこちなく頷く。

「そっか。良かった」

周りを味方につけ脅したも同然のくせに、本当にホッとしましたといわんばかりに微笑んでみせる松本君。その面の厚さに、言わされたこちらの方が恥ずかしくなってしまう。
すべてを見越した上の、計算尽くの精神が恐ろしい。

「ほら、いつまで泣いてんだよ荒川。桑原さん、許してくれるってよ」

ふ……ピタ。

その言葉に、ぎゅっと目を瞑り泣いていた荒川君がゆるゆると目を開き

「ゆる、す？」

うるうるとした瞳で、私を見つめてくる。

あ、れ？なんかこの人……犬耳ついてません？

素敵な始まりとはいかない

「ほんと、に？」

もう怒ってない？許してくれる？とばかりにじいっと見つめられたじろぐ。

なんでそんなに弱々しい声出してんですか。それじゃまるで迷子の子犬みたいじゃないですか。見た目は完璧孤高の人なんですから、ヤメて下さい。

クゥンクゥン鼻を鳴らし、そのまま擦り寄ってきそうな勢いの荒川君から目を逸らし距離をとる。

「……もう怒ってません」

だからもうこっちこそ勘弁して下さい。

うつ向き、小さく息を吐く。

すん、すんと鼻をすする音と共に、視界の端にある荒川君の腕が持ち上がり、ぐいっと制服の袖で目元を拭う。

こんな時、さりげなくハンカチを手渡したりすれば何かが芽生えるのかもしれない、なんて一瞬考えたけど。

チラっと荒川君を見、無言で視線を外す。

……現実はそうそう巧くは出来てないんだなぁ。
だって、涙だけじゃないんだもん。高く形良いお鼻からも垂れてるんだもん盛大に。無理無理無理。

「目も鼻も真っ赤じゃん、荒川。」
どんだけだよ。

周りに聞こえぬよう、ボソッと松本君が呟く。

その呆れた響きに、心から賛同します。

ほんと、どんだけだよ……。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9779y/

あの、そこ私の席なのですが

2011年12月10日23時53分発行